

特別対談

石原慎太郎の政治と文学

戦後体制への
反逆者



©時事

政治家として、
作家として、
戦後日本の偽善を
撃ち続けた石原慎太郎。
その功績とは何か。

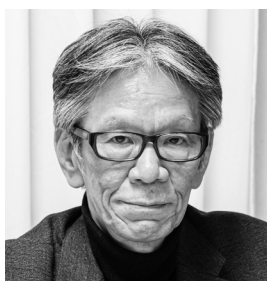
西村幸祐×富岡幸一郎

政治と文学の稀有なる「表現者」

富岡▼二〇二二年二月一日、石原慎太郎さんがお亡くなりになりました。享年、八十九でした。今日は西村さんと石原論を存分にやりたいと思います。

石原は一橋大学在学中に二十四歳で芥川賞を受賞。学生作家として華々しくデビューしましたが、「芥川賞作家として『太陽の季節』がブームになった」というよりも、この作品の受賞によってむしろ芥川賞が一般に広く知られるようになった。

一方、若い世代になると、石原慎太郎は作家というよりも圧倒的に政治家、特に都知事のイメージが強くて、保守系の人たちにとっても「尖閣諸島を都で購入」という、そういう保守政治家としての側面が印象強いのではないのでしょうか。しかし、石原さんの本質は文学者ですよ。政治と文学です。



西村幸祐(にしむらこうゆう)

52年東京生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科中退。80年代後半から主にスポーツをテーマに作家、批評家、ジャーナリストとして活動。02年日韓W杯取材後、拉致問題、歴史認識問題、メディア論に関する評論を展開。「表現者」編集委員を務めた。関東学院大学講師・岐阜女子大学客員教授。著書に「反日の構造」「幻の黄金時代 オンリーイェスタデイ'80s」「朝日新聞への論理的弔辞 西村幸祐メディア評論集」など多数。近著に「報道しない自由 「見えない東京の壁」とマスメディアの終焉」(ワニブックス)。

西村さんも石原文学はかなりお読みになっっているんですね。

西村▼高校時代から石原慎太郎の作品は好きでした。だからむしろ、慎太郎さんが文学者として認識されず、政治家としてのみクローズアップされていることにかねてから疑問を持っていました。それと、どうでもいいことかもしれないが、僕の世代だと、少なくとも私は石原と呼ぶより慎太郎の方がしっくりくる(笑)。

お亡くなりになり、追悼記事などで少しは文学者としての側面に焦点を当てたものが出るかと思いましたが、もっぱら政治家としての解説が多く、なかには政治思想が違いうからでしょう、罵倒に近いものまでありました。

例えば朝日新聞は二月二日に「『評伝』改憲、こだわり続けた末 石原慎太郎氏死去」という見出しの記事を出しましたが、憲法改正に「こだわり」という否定的ニュアンスをあえて選んでいる時点で、すでに客観性を失っていたわけで、朝日らしい偏向記事になった。

やはり富岡さんがおっしゃるように、慎太郎を考える際は文学者としての慎太郎と、政治家としての慎太郎、そして双方の交わりまで含めて捉えなければならぬ。それこそ、この雑誌のタイトルでもある「表現者」としての石原慎太郎に焦点を当て、彼が目指したのは一体、何だったの

か、彼が残したものは何かを考えなければならぬし、それこそが今日において非常に重要な問題を突きつけているのではないかと、と思います。

富岡▼石原が「改憲にこだわった」と朝日は書いてあるけれど、なぜこだわったのか、という話です。石原慎太郎には、戦後日本に対するいら立ちがあった。終戦時、石原は十三歳でしたが、そこから時間が経てば経つほど、日本の対米従属は薄まるどころか深まっていく。一九五二年に「独立Ⅱ主権回復」して以降、より独立国家としての体制を整えていかなければならなかったにもかかわらず、日本は逆行してアメリカなしでは立ち行かない状況に突き進んでいく。そうした戦後史の逆三角形のような構造に、石原はいらだっていました。

考えてみれば、『太陽の季節』が世に出た昭和三十一年は、「経済白書」が日本経済を「もはや戦後ではない」と位置づけた年です。前年に自由党と日本民主党が保守合同し、社会党も右派と左派が合同して、五五年体制ができた年です。政治と経済が「戦後は終わった」という偽装を開始したまさにその年に、石原は文壇にデビューしたんです。

三島に通じる戦後日本への予見性

西村▼その〈偽装〉に対する反発が、慎太郎にはあった。そ

の点で、石原慎太郎と三島由紀夫は、実は同じ位相に位置していたんです。二人は見解の相違もあり、対立したこともありました。が、「戦後日本」に対する位相については共通していた。

三島が『金閣寺』を書いたのも昭和三十一年でしたが、僕はその作品で三島が焼いたのは、実は「戦後」だったと思っているんです。一方、『太陽の季節』も、戦後を知らんふりして続けていこうとする大人社会への反乱でした。

富岡▼当時、「怒れる若者」なんて言葉も出しましたが、要するに戦後体制に拠ることで利益を得てきた大人たちに対する反逆が、『太陽の季節』にはあった。その点、単なるアップレゲール(戦後派、特に退廃的なものを指すことが多い)ではない。

西村▼そう、全く違います。石原作品は「近代文学」派、つまり「戦後派」との脈絡も全くありませんから。

富岡▼雑誌「近代文学」派というのは、主に第一次戦後派の、埴谷雄高、武田泰淳、野間宏らを指しますが、彼らはマルクス主義の洗礼を受けたが、文学と政治というものにおいて、戦前の日本共産党的左翼思想と距離をとった。

「新日本文学」というのは共産党系です。「近代文学」派は政治優位ではなくバランスをとり、芸術至上主義を掲げながら、政治と文学理論を展開していました。

政治と文学といったときに、石原が考えていた政治とい



富岡幸一郎(とみおかこういちろう)

57年東京都生まれ。中央大学文学部仏文科卒業。在学中「意識の暗室」で『群像』新人文学賞優秀作受賞、評論家活動を開始する。現在、関東学院大学国際文化学部教授、鎌倉文学館館長。「表現者」顧問。著書に『内村鑑三』『仮面の神学 三島由紀夫論』『使徒的人間 カール・バルト』『非戦論』『新大東亜戦争肯定論』『千年残る日本語へ』『最後の思想 三島由紀夫と吉本隆明』『北の思想 一神教と日本人』『川端康成 魔界の文学』『虚妄の戦後』『天皇論 江藤淳と三島由紀夫』など多数。近著に『入門 三島由紀夫「文武両道」の哲学』(ビジネス社)。

うのは、戦後派の文学者が考えていたものとは違っていたという点が重要です。石原はいわゆる第一次戦後派などとは全く違った、また日本近代文学とは全く違う文脈から出てきた作家です。それはまさに、『太陽の季節』にある「男根が障子突き破った」という表現そのもののような形の登場でした。

西村▼だから三島は慎太郎を「エトランジェ(異邦人)」と、最初の二人の対談で評したわけですよ。

富岡▼最初の対談は昭和三十一年四月号の『文學界』でした。芥川賞が同年一月号での発表でしたから、受賞直後に対談したんですね。

三島は冒頭、「石原さんはまさにエトランジェ、異邦人だ」と言い、さらに「客(まろうと)、客人である」とも言っています。そういう空気を引っ掛けて、当時の文壇に現れたのだ、という点で非常に期待もしていた。

西村▼エトランジェ、というのは「戦後の日本社会にとつて」の「異邦人」という意味で強烈です。いわゆる戦後文学派へのアンチテーゼと捉えていたのではないか……。

三島は大東亜戦争が始まった昭和十六年に十六歳で「花ざかりの森」を書き、戦後は二十一歳の学生時代に『人間』という月刊誌に「煙草」という短編小説を書いて戦後文壇にデビューした。しかし「戦後になって、日本はよくなった」という実感を持っていた人たちとは、全く異質だった。そういう意味で、石原と位相が同じだった。

富岡▼世代が違っても位相は同じだった、というのが面白いですね。三島は大正十四年生まれで、昭和と満年齢が重なっている。十六歳で学習院中等科の時、「花ざかりの森」を書いた。昭和十九年には単行本も出版しています。

彼自身は、近代批判や日本回帰を掲げる日本浪漫派の流れを汲んでいましたから、戦後文壇においては、デビューしづらい位相にいました。

西村▼本来なら、出る余地がなかったでしょうね。

富岡▼ある意味奇跡的に、戦後文壇に迎えられたところがあります。『人間』に「煙草」を書かせた川端康成の功績もあつたでしょうが。

西村▼功績は大きいですね。

富岡▼一方で、三島も戦後的なるものを内包し、迎合せざ

るを得ないところもありました。『仮面の告白』なんかはそうでしょう。

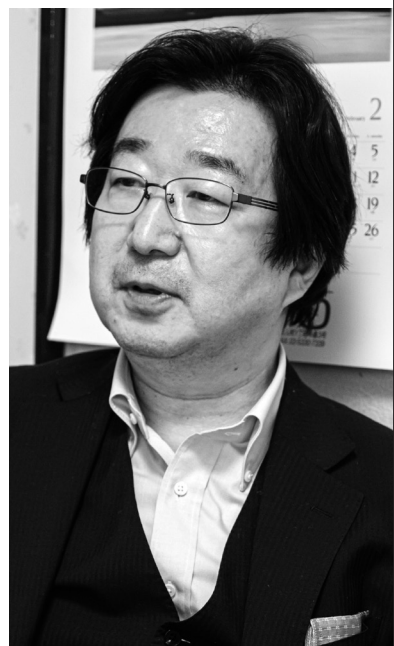
西村▼まさに迎合です。

富岡▼そんな三島にとって、ある意味石原の登場は、頭の上の雲が晴れたような思いもあったかもしれない。

西村▼異質だけれど、似ているものを感じたんでしょうね。石原慎太郎の登場は、才気あふれる若者の雰囲気に満ち満ちていました。彼自身、大学在学中に「一橋文芸」という同人誌を復刊して処女作の小説『灰色の教室』を書いたという原点はありますが、いわゆる戦後派作家の登場とは違っていた。

富岡▼『太陽の季節』の後に石原が書いた『完全な遊戯』を、三島は高く評価しています。残虐非道な話で、若者が精神病の女性を拉致し、暴虐の限りを尽くして、最後は海に突き落として殺すという話です。当時の文壇では全く無視されていきました。一方で、三島は「これは未来小説だ」とまで言ったのです。実際、女子高生コンクリート詰め事件のように、『完全な遊戯』を思わせる事件が三十年後に起きました。

西村▼あの事件は一九八九年の一月に起きました。まさに昭和の終わりの年ですが、昭和天皇崩御の前なので、「昭和六十四年」に起きた事件なんです。平成のへ失われた三十



年を予感させるような、衝撃的で象徴的な事件でした。

石原慎太郎は『完全な遊戯』を悪や暴力を題材とした、単なるノワールとして描いたのではない。作家の感性というものはやはり冴えていて、石原は実際にそうした事件が起きる何十年も前に、「男性が女性を拉致し、強姦して、物のように捨てる」という事件が起こるような危機的状況が来ることをどこかで感じていたんでしょう。

三島は『午後の曳航』という作品を昭和三十八年（一九六三年）に書いていますが、これは海に生きる船乗りの男が、未亡人である主人公の少年の母親と男女関係になり、性行為を覗き見てしまう。海に生き、海に死ぬ英雄のはずの船乗りが、陸の上では墮落していると感じた少年が、毒をもって「処刑」という作品です。作中、この少年は人間を毒殺する前に、野良猫を解剖するという行為に及んでい

る。これも一九九七年の酒鬼薔薇事件の犯人の登場を予言したのと同じです。ある意味、近未来のディストピア的なところがある。

富岡▼なるほど、作品レベルでも石原と三島には似ているところがあるんですね。

西村▼あるいは、互いに影響し合っていたというか。そしてその後、慎太郎は昭和四十三年（一九六八年）に政治の世界に乗り出し、三島はその二年後の昭和四十五年（一九七〇年）に市ヶ谷で自決します。

「対米従属」に対する警鐘

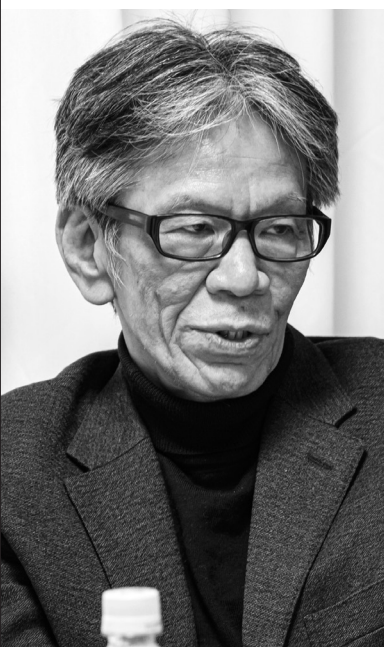
富岡▼石原は昭和四十三年、三十六歳で参議院選挙に自民党公認候補として出馬し、三〇一万二五二票という驚異的な得票数で当選しました。その直後に江藤淳と『季刊藝術』で「人間・表現・政治」というタイトルで対談し、ここで石原は自身の政治と文学について語っています。『季刊藝術』は江藤さんがやっていた雑誌で、二人は湘南中学の先輩・後輩だったんですね。

石原は「政治を、僕自身の表現の一つの方法として選んだ」とし、では何を表現するのかといえば「自分の存在論である」と言っているんです。

さらにも言っています。

「小説の場合には、小説家が書こうと思う情念なり、芸術的な理想というものを持たなければ、小説を書くという一つの機能が生まれてこないし、表現が機能として働いてこない。ところが理念がなくても政治という機能は動いているんだ。それが現代日本の政治の悲劇で、政治が表現になっていないんだ。表現すべき理念がないのに、政治の機能だけがあるんだよ」。

西村▼その慎太郎の言葉には全く同感ですね。彼はその後、平成七年（一九九五年）に国会議員を辞めるんだけれど、その時のスピーチに通じるものがあります。一九九五年頃といえば、日本が最も忌まわしい時代に突入していました。村山内閣を擁する日本で阪神大震災が発生し、オウム事件が発生。一九九七年には先ほど触れた酒鬼薔薇事件が起きています。



石原は一九九五年四月、「国会議員在職二十五周年」で表彰されることになるのですが、嫌々ながらその場に行つて、受賞の言葉を述べるうちに、それが辞任発言になりました。一部を引きます。

（イデオロギーの生んだ冷戦構造が崩壊した今、政治の対立軸が喪失されて、私たちは新しい軽薄な混乱の中にあります。新しい文明秩序の造形のために、多くの可能性に満ちているはずのこの日本の将来を毀損しかねないような問題が幾つも露呈してきているのに、現今の政治はそれにとんと手をつけられぬままに、すべての政党、ほとんどの政治家は、今はただいかにみずからの身を保つかという最も利己的で卑しい保身の目的のためにしか働いていません。こうした政治の現況に、国民がもはや軽蔑を通り越して、期待し裏切られることにも倦んで、ただ無関心に過ぎているという状況は、政治の本質的危機としか言いようがありません。

植民地支配によって成り立っていたヨーロッパ近代主義の繁栄が終焉し、到来しつつある新しい歴史のうねりの中で、新しい世界の文明秩序が期待されている今、歴史的必然としてアジアに回帰し、他のだれにも増して新しい歴史創造の作業への参加資格のあるはずのこの日本は、いまだに、国家としての明確な意思表示、示さえてきぬ、男の姿をしな

が、実は男子としての能力を欠いた。さながら、さながら去勢された宦官のような国家になり果てています。

それを官僚による政治支配のせいというなら、その責任は、それを放置している我々すべての政治家にこそあるのではありませんか。現在の日本国民の政治に対する軽侮と不信は、今日このような表彰を受けたとはいえ、実はいたずらに馬齢を重ねてきただけでしかない、まさにこの私自身の罪科であるということを変更して恥じ入り慙愧するのみであります。

それでもなお、かくも長きにわたつてこのような私に期待し支持を賜つた国民の皆様、この場をおかりして改めて心より御礼を申し上げ、あわせて深い深い慙愧の念をあらわす次第であります。そして、そのゆえをもって、私は、今日この限りにおいて国会議員を辞職させていただきます。（傍点十西村）

これを聞いた議員の中で、「宦官」という言葉の意味するところを瞬時に理解できた人がどれくらいいたか、定かではありませんが、非常に象徴的なスピーチであり、実的に射た指摘だと思えます。

富岡▼長く国会議員として、環境庁長官、運輸大臣などを歴任し、一九七三年にはタカ派といわれる「青嵐会」を立ち上げていました。政治パフォーマンスとしても際立ってい

ましたが、「戦後政治に理念がなく、機能しかない」という状況を変えるのは、石原一人の力では如何ともしがたかったでしょうね。

西村▼その後、一九九九年に都知事に返り咲きますが、やはり政治でやり残したという思いがあったのでしょう。

「東京から日本を変える」というキャッチフレーズで都知事選に打って出ました。

富岡▼都知事時代にはディーゼル車規制や、中小企業へ積極融資する「新銀行東京」を設置するなど、精力的に数々の具体的な政策を手掛けましたよね。

西村▼東京の公立学校で日の丸と君が代を徹底させたことは素晴らしい業績でした。それに、羽田空港の国際化も評価しなければならぬ。あれは成田闘争で警官が殉職するなど、血が流れたこともあり、国際空港の機能を羽田にも持たせることに抵抗があったんです。それを石原がトップダウンで羽田国際化に踏み切った。

しかもこの国際化には、横田空域との関連もありました。石原は都知事としてはつきりと、「日本は東京上空の管制権を持っていない、在日アメリカ軍、横田基地に握られている」と述べ、「これでは植民地だ」と批判していた。しかし、いわゆる保守派も含めてほとんど誰も反応しなかった。

ソニーの盛田昭夫と『「NO」と言える日本』を出したが、平成が始まる一九八九年、『「NO」と言えるアジア』をマハティールと出したのが一九九四年。左派的ではないスタンスから、対米従属を批判したが、当たり前の常識に基づいた発言だった。保守派はこうした点よりも対中的な尖閣問題を、反日サヨクは『三国人発言』などやはり対中・対韓の部分しかスポットを当ててきませんでしたね。

富岡▼その意味で、石原は「新しいものを戦後政治に持ち込む」ことではなく、「この国の政治体制に対する反逆者」としてそこにいるほかなかった。それに対するいら立ちは最後まであったでしょう。

西村▼でしょうね。だからこそ都知事になり、その後再度、国政に復帰する際に橋下徹に期待してしまった。

富岡▼あれはまずかったですよね(笑)。

西村▼あれしかなかったんでしょうか。

富岡▼率直に言って、晩年に橋下徹のような存在に幻惑されたことについては、「石原慎太郎も老いたか」と思わざるを得ませんでした。

一方で、政治に何とか、表現すべき理念を持ち込みたいという理想があったからこそ、議員、都知事として政治をやりながら作家活動が続けたことは重要ですよ。

「命を懸けて守るべきもの」は何か

西村▼戦後史という時代に置いてみると、彼の小説家としての文学活動と、政治家としての石原は、やはり両輪で動いていたという気がします。

『太陽の季節』を書いた一九五五年、五五年体制が完成し、自社が戦後体制を両翼から支える形になりました。それに飽き足らなかつた慎太郎は、一九六四年、東京五輪の年に『行為と死』という名作を書いた。

富岡▼この『行為と死』は石原文学の代表作の一つです。

西村▼素晴らしい作品ですよ。僕はどうしてこの作品が映画化されなかつたのか、不思議に思っているくらいです。

富岡▼読者のために説明しておく、『行為と死』は第一次中東戦争を背景とする中編小説です。エジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化を宣言し、これに反発した英仏両国が介入してイスラエルのシナイ半島に侵攻。そのさなかで、中東に駐在している日本人商社マンが主人公です。

主人公はファリダというアラブ人の女性と愛し合っていますが、二人は戦火という一種の極限状態の中で、究極的な愛を体験する。しばらくして商社マンは日本に帰国し、また別の日本人女性と交際を始めますが、どんなに深い性愛があつても、日常の中で愛情の絶対性が腐敗していく。

つまり中東で戦争という人間の極限状態を体験してし

まったために、「偽の平和」に包まれている日本に帰ってきても、彼は生と性の実感を得られず、自らを失っていく、という筋書きです。

この作品では、主人公はアラブ人から「あなたはこの前の戦争に参加しましたか」と聞かれます。これは大東亜戦争、第二次世界大戦のことで、主人公は「参加しようとしたとき、戦争は終わった」と答えます。

西村▼これは石原自身のことです。

富岡▼そうでしょうね。主人公は「おかげで助かった」と続けますが、アラブ人は「いや、年齢が年齢ならあなたは必ず戦争に出ていった」と言う。

戦乱のアラブと偽の平和の東京のギャップ、これこそが石原が描きたかつたことなのでしょう。アラブの戦地で主人公は、恋人であるファリダに「自分は異教徒だからこの戦争にはかかわらない」と宣言し、「一緒に日本に逃げよう」と持ちかけます。しかしファリダは、「自分はアラブ人として国家のために戦う、武器を取る」と言う。

西村▼それを聞いてようやく彼も目覚める。

富岡▼そう、武器を取って船を爆破するという行為に及ぶのですが、日本に帰ってきてみると、守るべき国家がない。平和ではあるけれど、それは「腐敗した平和」だし、「反戦」を唱える人々もいるけれど、命を懸けてまでという

気概はない。

西村▼「命を懸けられるものがあるか」という命題は、石原にとっては重要でした。例えば、都知事時代の二〇一一年に、東日本大震災が発生しました。福島第一原発事故の対処のために、東京消防庁のレスキュー隊に派遣要請が来ますが、石原は都知事として、悩みに悩んだ結果、一度はこれを断っています。しかしどうしようもなくなった菅直人内閣を見た安倍晋三が動いて、息子で議員の石原伸晃を介して説得しました。「自衛隊のレンジャー部隊やヘリ部隊も出たが、人手が足りない、レスキュー隊を出してほしい」と。そこで石原慎太郎は、今度はレスキュー隊の派遣を決めた。

命がけの放水作業を終えて十日後に帰還したレスキュー隊の報告を、石原は都知事として受けますが、その時、石原は涙声で感謝の意を伝えていきます。あれは死を恐れずに任務に当たった隊員たちに対する感謝ですよ。

『行為と死』では、主人公が帰国後、日本で見るのができなかった「命を懸けて行為に及ぶ」人たちの姿をそこに見た。だから石原は泣いたんです。

しかも、この『行為と死』は、先ほど挙げた三島の『午後の曳航』との相関関係があるのではないかと思えます。

『午後の曳航』で海の上での英雄が、陸に上がって墮落す

るといえるのは、アラブと日本でギャップを感じている『行為と死』の主人公と重なる。しかしそれは、設定の盗用とか借用といった話ではなくて、石原は石原の、三島は三島の内的必然によってこれを書いたところ、テーマが一致した、ということですよ。二人は世代は違いますが、抱えていた時代精神が一致していた。だから「時代」を先取りしたような作品を描くことができたのでしょう。

ベトナムで確かめた問題意識

富岡▼石原が実際の「戦場」を目の当たりにしたのは、昭和四十二年、ベトナム戦争中の現地でした。読売新聞から「取材でベトナムに行かないか」と言われたんです。当時、クリスマスで一時停戦しているから、その状況を取材してくれというオファーが、流行作家の石原に来た。石原としては「ちよつと行ってみようか」というくらいの軽い気持ちでベトナムに入ったと当時、書いています。

西村▼戦争記を書いていますよね。当時僕は高校一年生でしたが、『週刊現代』の連載を読んでいます。

富岡▼『国家なる幻影』上巻の冒頭にも「ベトナムから政治へ」という文章が収録されています。

ベトナム行きは、石原が政治家を志す大きなきっかけになりました。当初こそ軽い気持ちだった石原でしたが、

戦争の実態、特にベトコンの戦いを知ること、まさに『行為と死』の主人公の立場に立つわけです。

作家って面白いですね。自らの立場を予感していたわけでもないでしょうが、作品を書いたら同じような立場に自分が立つことになった。小説で書いたことを、作者自身が追体験するような形になったんです。

このベトナム体験は石原にとつては非常に大きなものだった。日本に対して薄々感じていた「偽物の平和」、「嘘の反戦」を実際に確認したんです。

西村▼当時、日本は「ベ平連」の小田実などが反戦運動をしており、石原も最初は一緒になってやっていたんですが、袂を分かち、最終的にはその欺瞞、嘘を石原は見破りました。

『国家なる幻影』にも書いています。「ベトナム体験に照らして私に俄かに燃してきた日本という祖国への懸念に加えて、思いがけぬ付録をもたらした。私は知らぬ間に戦場に猖獗するという肝炎に感染し、潜伏期間を経て発症した」。

富岡▼その後、「待ち伏せ」という短編を書きます。小品だけれど、これも石原文学を代表する作品といつていい。いや、戦後文学の代表作といつてもいいでしょう。

カメラマンと一緒に主人公がベトナム戦争の最前線に入っていく。ベトコンを攻撃する壕に入り、闇の中で敵が現れ

るのを待つんです。その闇としじまの描写が素晴らしく、敵を待つ主人公の心身の極限状態を繊細に描いています。

面白いのは、この作品で主人公は米軍の部隊長から身を守るための武器を渡されるんですが、彼は「第三者だから」と言つて受け取らない。そのことが、最前線に行った時に強い後悔として襲ってくるんです。

西村▼まさに憲法九条の何たるかを表現していますよ。

富岡▼石原の問題意識が、作品として昇華しています。

西村▼文学作品としても高く評価されるべきで、同じくベトナム経験を「闇三部作」といわれる作品にした開高健は有名ですが、彼と石原を一緒にされては困る(笑)。

富岡▼開高健は才気ある小説家だとは思いますが、文学的抒情が強すぎますよね。近代小説の正統な手法を遅ればせながら踏襲しているとはいえるのかもしれませんが。それに対して石原の文体は、それまでの文学性、抒情をいざなう文学的修辭を一切、そぎ落としています。

西村▼乾いた文体です。

富岡▼はい。『太陽の季節』に関しては三島も「肉体的な題材を使いながら、本質的には文学青年の文章になっている」と評していますが、『完全な遊戯』になると、そうした修辭は一切そぎ落とされています。それが「待ち伏せ」で頂点までいく。

『化石の森』が描く近代的人間の崩壊

西村▼石原は七〇年安保の頃に『化石の森』を書いていますが、ここでも「安保闘争」そのものを捨象している。

富岡▼上下巻で、原稿用紙千三百枚にもなる大著ですが、これを政治家を務めながら書いたところが面白い。

『化石の森』は、高校時代の女学生と再会した医学生の人公が、彼女への殺意にとり憑かれ、さらに肉親、特に母親との葛藤を通じて、近代的な家族の変質やさらにいえば近代的な人間の崩壊、限界を描いた作品です。

西村さんの言われるように当時の学生運動、全共闘で騒いでいた世俗を捨象している。もともと深い、戦後日本というか、近代世界といってもいいのですが、二十世紀後半の人間の危機まで描いています。

西村▼そのあたりの作家的感性はすごいものがあります。

人間の危機を見通す力というんでしょうか。都知事時代に、自分の親が死んだのに年金打ち切りを恐れて死亡届を出さず、不正受給を続けるために親の遺体を自宅に放置していた、という事件が起きましたが、石原はこれに激怒していました。人としてこれは許されることではない、社会制度の問題ではなく、人間の感性の問題だと。それに通じるものがあります。

富岡▼そうしたモラルへの根源的な問いかけを『化石の森』は描いていますからね。

西村▼これはデビューから十五年目の作品です。主人公の恋人になる女性は「英子」といいますが、実はこれは「太陽の季節」で主人公の恋人に当たる女性と同じ名前なんですよ。

富岡▼そうか、おそらく意識して書いたんだろうね。『太陽の季節』が一つの理想としての「戦後」の終焉を謳っている。そして『化石の森』は戦後や日本の対米従属の問題を通り越した、近代的な人間の崩壊を描いています。

家族や共同体の崩壊、社会の崩壊というものはもちろんいろいろな作家の作品に描かれています。石原はある意味、他者とのかわりという近代文学の命題に正面から取り組みつつ、同時に「近代的な人間像」が崩れていく様子を描いている。非常に時代を「先取り」した作品です。

西村▼僕は昔、買った本には日付を入れていたんですが、刊行当時買った『化石の森』を改めて今見たところ「昭和四十五年十月」とあった。三島が自決する一月前です。

富岡▼そうでしたか。三島はこれを読んでいないね。

西村▼この作品に触れた評論は読んだことがないですね。

富岡▼読んでいたらおそらく、評価したのではないかと思えます。

西村賢太を強く推していた

西村▼『化石の森』の後に書かれた『光より速きわれら』という小説もいいんですよ。

富岡▼西村さんがこの作品を取り上げるとは思わず、びっくりしました(笑)。一九七六年刊行の、石原が四十四歳の時に書かれた作品です。『行為と死』とともに、石原文学の見逃せない一作です。

葛城東兵衛という主人公が登場しますが、実はこれは暗黒舞踏の創始者である土方巽をモデルにしています。この舞踏家と若い女性のかかわりを描きながら、人間の肉体と精神、麻薬の問題なども登場する。肉体を極限まで使う舞踏を描くと同時に、一瞬一瞬の人間の存在感や、存在の幻惑のようなものも描かれる、前衛的な小説です。ミステリアスな香りもする。

西村▼この作品があまりに文壇で無視されるので、頭にきて『三田文学』か『ニューミュージック・マガジン』に書評を書いた。どっちに書いたのか憶えていない(笑)。僕が大学を中退した七六年のことです。

富岡▼これは三島事件のかなり後ですが、肉体と精神の問題があり、三島の自決も意識して書かれている。

西村▼はい。かなり強く影響を受けています。石原自身も五〇年代後半から六〇年代の「あたらしい芸術運動」にかか

わっていて、浅利慶太なども付き合いましたが、土方巽は三島や澁澤龍彦のラインです。おそらく土方と石原は会ったことがあったんでしょう。

『化石の森』の後にこれが書かれたことにすごく意味があると思います。先ほど富岡さんがおっしゃったように、『化石の森』では人間性の喪失と獣としての人間を描いた。そこで土方巽のような肉体表現を突き詰めていく存在を持ち出して、そこに何かを見ようとしたのではないのでしょうか。

富岡▼土方は「前衛」という言葉を好まず、むしろ「人間がもともと持っている原型、根源に戻る」ことを意識していた。身体を使って、近代的な人間像をひっくり返そうと。そこは石原慎太郎と重なるところがある。

西村▼『太陽の季節』にも、そういう肉体感覚がありますよね。十五年後、よりそうした感覚が難しくなってきた状況を突き破るために、舞踏家を使ったのかなと思います。

富岡▼天体や宇宙の描写も多く出てきますが、これもヨツトレースを愛した石原の、海を通じた人間の根源的な感覚ゆえでしょう。

西村▼慎太郎さんは、亡くなった翌々日に後を追うように亡くなった私小説家の西村賢太を非常に高く買っていました。

富岡▼『苦役列車』で芥川賞を受賞しましたが、あの時も選

考委員の石原がかなり強く推したんですよ。

西村▼彼が推していなかったら、西村は芥川賞を獲れなかっただろうといわれています。その時の選評で、石原はこう評しています。

〔西村賢太氏の「苦役列車」は、これはまた体臭の濃すぎる作品だが、この作者の「どうせ俺は——」といった開き直りは、手先の器用さを超えた人間のあるジュニユイン（本物）なるものを感じさせてくれる。〕

超底辺の若者の風俗といえよそれきりだが、それにまみれきった人間の存在は奇妙な光を感じさせる。日本文学の特性的の一つは私小説の伝統にあるが、かつて上林暁や尾崎一雄が描いた一種の自己露呈に依る人間の真实性の伝統に繋がる。いやむしろ破壊的な自分をさらに追いこみ追いかみ破滅した田中英光の無残さにも通う。

しかしこの作家はどっこい生き続けるだろうが、近年珍しい作家の登場と思われる。（『文藝春秋』二〇一一年三月号）

富岡▼石原は、西村の作品や生き方に「人間の根源的な感覚」を見たのかもしれないね。

改憲論でぶれた「戦後政治の超克」

西村▼ここまで語ってききましたが、実は石原に対しては僕は一つ、悔いていることがあるんですよ。最初に直接、石

原慎太郎に接したのは、学生時代に彼が日吉に講演に来た時でした。講演内容は残念ながら憶えていないのですが、その後の質疑応答でいくつか質問したんです。そこで本当はもう一つ、聞き忘れたことがあります。いつかお会いしたら改めて聞こう、と思っっているうちに五十年経ち（笑）、都知事時代に二回取材でお目にかかったことがありますが、その時は文学的なことは訊けなかったので、そのうち、きちんとインタビューしたいと思っっていた。なかなか機会がないうちに……ついに石原慎太郎は亡くなっちゃった。残念でたまりません。

どういう質問かというと、『太陽の季節』と『行為と死』では、描かれているセックスの意味が違っていったんです。石原慎太郎の中でセックスの位置がどう変化したのか、それを訊いてみたかった。

富岡▼質問する時には自分なりの答えを質問者も持っているものだけだ（笑）、それはどうなんですか。

西村▼学生だったから確たるものを持っていたわけではなかったんだけど、より存在論として深まったのかなと思っただけですよ。『太陽の季節』における英子との性行为は、要するにボクシングでパンチを撃つのと同じような感覚。しかし『行為と死』では、アラブの女性とも、日本の女性とも、セックスが描かれています。性が「死」を背景

にして初めて「生」を獲得するツールになった。性の存在論ですね。

富岡▼僕は石原さんとは一度だけ、お会いしたことがあります。一九九〇年に『わが人生の時の時』を出版しました。これは四十の短編・小品を集めた作品集ですが、自分の体験だけでなく、聞いた話などをヒントにしながらか、「決定的瞬間」を切り取った話で構成されています。この作品も文体に全く無駄がない。淡々と描かれています。しかしその中に、人間の深さ、日常を突き抜ける不可知なものの到来を感じさせる雰囲気まで通底しています。

その中に「人生を味わいすぎた男」という作品があります。嫌々ながら誘われてゲイバーに行ってみたら、そのパーティーが実は真珠湾攻撃の時に爆撃機に乗っていたという。その後あらゆる激戦地に回されたが、自分が死ぬと思ったことは一度もない。むしろ、真珠湾で自分は一度死んでいて、死んだままなのではないか、と思うくらいの絶対的な感覚を語ります。「あれを経験したら、後の人生はもう終わったも同然だ」と言うんですね。

これは本当にいい作品集で、駆け出しの文芸評論家だった僕が書評を書いたところ、石原さんも喜んで、この本の書評を書いた書き手を何人か呼んで、食事する席を設けてくれたんです。

その時には秋山駿さんも長老の文芸評論家として来ていて、僕なんかはまだ若手で（笑）。永田町近くの料亭に呼ばれたのですが、石原さんはちょっと遅れてきたんですね。座敷だから畳に座っていたんだけど、下から見上げた石原さんの第一印象は「うわ、足が長い」（笑）。「まさに『太陽の季節』だな」と思いました。

その時、「我々はこの場所で、田中角栄の金脈を打倒する密談をしたんです」なんておっしゃっていました。

……名前が出たのでついでもいいですが、石原が二〇一六年に『天才』という小説で、田中角栄を一人称で書きましたね。あの作品は、僕としてはちょっと認めがたいところがある。

西村▼僕もあまり評価していません。あれは本人の動機があつてのことではなく、幻冬舎が書かせたものではないかと。

富岡▼むしろ『国家なる幻影』の中にある、田中角栄と政治家・石原が対峙する場面の方が、リアリティもあるし意味がありますよ。

西村▼ただ石原慎太郎も田中角栄が無罪だと気づいたかもしれません。それでも橋下徹について幻惑されたと言ったけれど、それと通じるところがあるのかもしれない。

富岡▼改憲勢力になりうると思っていたのかもしれない

が、橋下ありきの改憲が本当にいいのかどうか。むしろ石原は、改憲そのものが目的ではなく、戦後政治そのものを超克することを目的としていたはずで、もつといえれば近代の超克であり、明治以降の日本人の魂のあり方そのものを、問わなければならない。石原は本来、そうした命題を持っていたはずで。

西村▼ええ。例えば昭和十六年十一月から翌年にかけて『中央公論』誌上で三回の座談会が行われます。出席者は鈴木成高、高坂正顕、西谷啓治、高山岩男で、「世界史的立場と日本」と題して論じ合っている。

富岡▼いわゆる京都学派ですね。西田哲学の流れを汲み、西洋と日本の魂をぶつけることを考えた。

西村▼そういう立脚点に立たざるを得ないという時代認識を、当時の日本の最高知性たちは持っていました。日本がそういう国だったのです。ところが戦後はどうか。「一体どうなっているんだ！」という怒りを、石原はずっと持ち続けていたんでしょう。

文学史を超えて戦後史に名を刻んだ人

富岡▼「政治が機能でしかなかった」と石原が言ったとき、それは何を意味していたかといえば、やはり戦後体制を維持し続けてきたことでしょう。七十五年経っても、そ

れは維持され続けている。その意味で、石原の問いかけは大きい。

西村さんが冒頭、おっしゃったように、朝日新聞や東京新聞は石原の政治思想を批判し、発言を「差別的だ」などと指摘していましたが、石原の政治家としての発言が真に意図するところは、実は小説家としての作品に描かれているんですよ。だから政治と文学が分かれているのでは決してなく、一つの表現者の行いとして見なければならぬ。

僕も追悼文を依頼されて、改めて石原作品を読み直してみました。政治家としての評価はそれとしてあっていいけれど、一方で文学者、作家として、政治まで含めて「表現」し得たという点を重視すべきでしょう。近代と戦後日本に反逆した小説家という意味で、近代文学史に刻まれるべき名前だと思います。その上で文学史の中に閉じ込めておいてはいけない、戦後史における功績を見るべきでしょう。

西村▼そこを理解して、全体として石原慎太郎を偉大な存在として位置づけておかないと、後に残された者としては申し訳ない気持ちになります。今回、富岡さんと石原慎太郎について語ってみて、文学者としての石原、政治家としての石原が抱いていたものは、今の日本にとっても非常に切実なテーマであることを再確認できました。今、ウクライナ戦争が日本に突きつけているものに繋がっています。